

広島県廿日市市 宗高尾城跡検出の地鎮の研究

木下密運・西山要一・浅岡俊夫・藤田広幸

1. 遺跡の概要

宗高尾城は広島県廿日市市上平良宗高尾山にある中世・戦国期の山城として知られていた。廿日市市は広島県の西部、広島市の西隣に位置し、地名のとおり広島湾に面した海岸沿いに発達した市場町として開けた。その眼前には、1996年12月、世界文化遺産に登録された安芸宮島の厳島神社が鎮座し、海面に浮かぶ鳥居と社殿群を望むことができる。南北朝期には廿日市付近は「佐西の浦」と呼ばれ、厳島神社へ渡る船着き場があったことが記されており、厳島神社へ参詣する人達の宿場を兼ねた門前町が形成されていたと考えられる⁽¹⁾。また、室町時代、廿日市は「宮廿日市」とも呼ばれており、宮島との関係の深さが窺える。因みに、2005年11月1日、宮島町は大野町と共に廿日市市と合併した。

宗高尾城が存在した丘陵は、廿日市の由来となった市場町の西側に、ほぼ東西に広島湾に向かって衝立のように伸び、海中に没する。そのため、陸上交通はこの丘陵で遮断された形になり、さらに、廿日市の町屋あたりは砂堆が形成され、干潟や入り江など低湿地が広がって東西交通の要衝となっていた。事実、戦国時代には図1に見るように丘陵上にほぼ等間隔に置かれた5つの城砦が自然の要害を巧みに利用し、人工的にも交通を遮断して西方からの守りを固めていたのである。その5つの城砦の要となったのが宗高尾城で、さらに桜尾城を核とする安芸側の防衛網ができあがっていた。海上交通の面でも、長門・周防から安芸への門戸に当たるこの地は、宮島との間が大野瀬戸と呼ばれ、非常に狭い水道を形成した交通の要衝である。1555（弘治元）年、中国地方の覇権をもくろむ毛利元就がそのことをよく知って、山口に居て防長に覇を唱える大内氏の武将陶晴賢を宮島に誘き出し、奇襲をかけて勝利した厳島合戦は有名である。その結果、大内氏は滅び、元就は中国地方の覇権を手にする足固めを築いたのであった。

一方、古代においては、この地域は安芸における宗教活動の一大拠点をなしていた。廿日市の背後にそびえる山頂には、宮島の弥山と南北に対峙するように、今も極楽寺が法灯を伝えている。その極楽寺と弥山とを結ぶ線上、廿日市側の海岸には厳島神社の外宮である地御前神社が、宮島の海岸には厳島神社が祀られている。厳島神社は、平安時代末、平清盛の加護のもとに急速に成長し、安芸の一宮としての地位を獲得する。それまでは、廿日市市平良にある速谷神社が安芸国の国造成立に関わりをもつ「式内社」として一宮の地位にあった。速谷神社は極楽寺の南麓、可愛川の扇状地に鎮座し、弥山からは磁北上に位置している。また、後述するように宗高尾山頂からは、山城が築かれる以前の山岳信仰に関連すると思われる遺構、遺物が検出されている。宗高尾山も、ほぼ極楽寺と弥山を結ぶ線上にあり、速谷神社とは750mの指呼の間にある。このように、この地域は宮島の弥山と極楽寺を結ぶ山岳信仰にまつわる宗教上の強い結び付きが感じられる地域を構成していた、と思われる。

宗高尾城跡の発掘調査は、七尾土地区画整理事業にともない同発掘調査団（団長 石田米孝）が組織され、廿日市市教育委員会の藤田広幸を調査主任として、1994年から翌95年にかけて実施された。発掘面積は山頂の主郭を中心に周囲に配置された曲輪など約6000㎡におよび、大きな成果が得られた。その調査概要は『廿日市市 宗高尾城

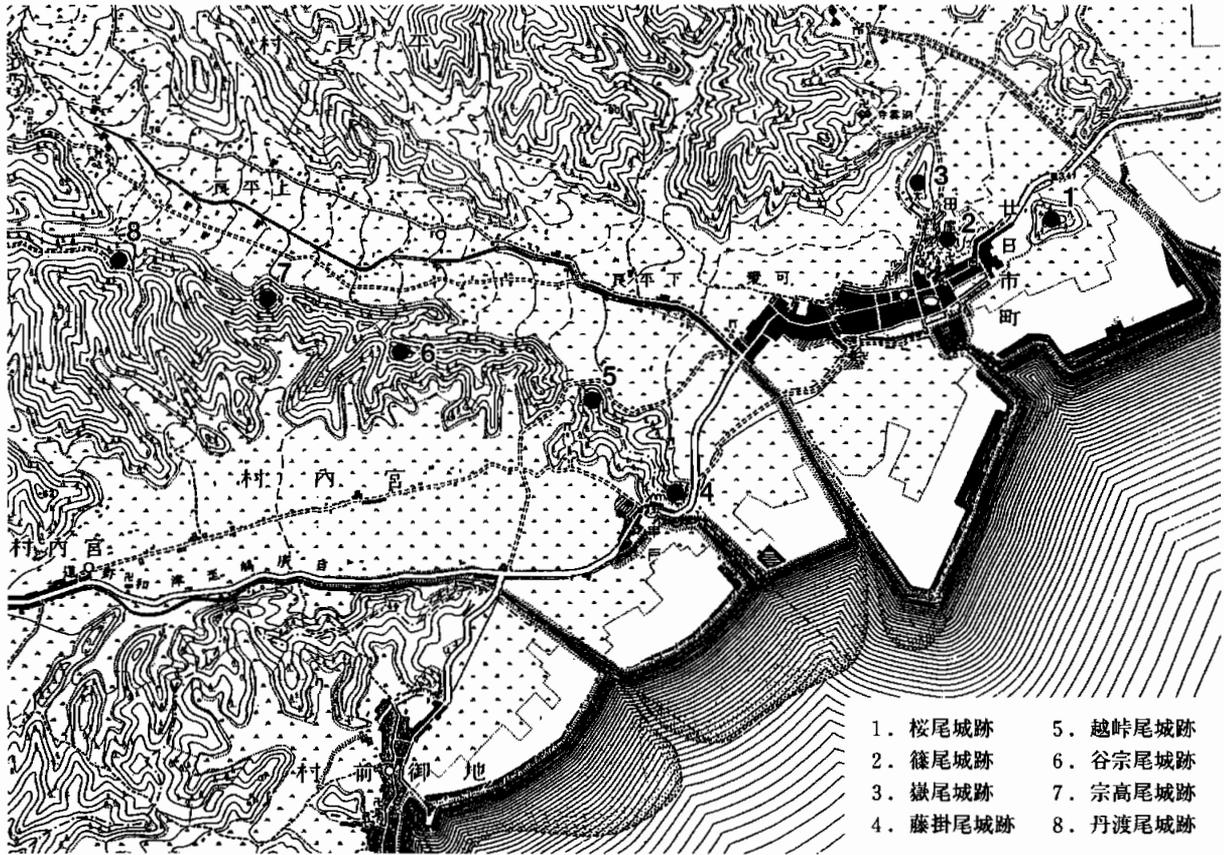


図1 城跡の分布位置図（明治27年測図の「甘日市」1/20000陸測図を1/25000に調整）

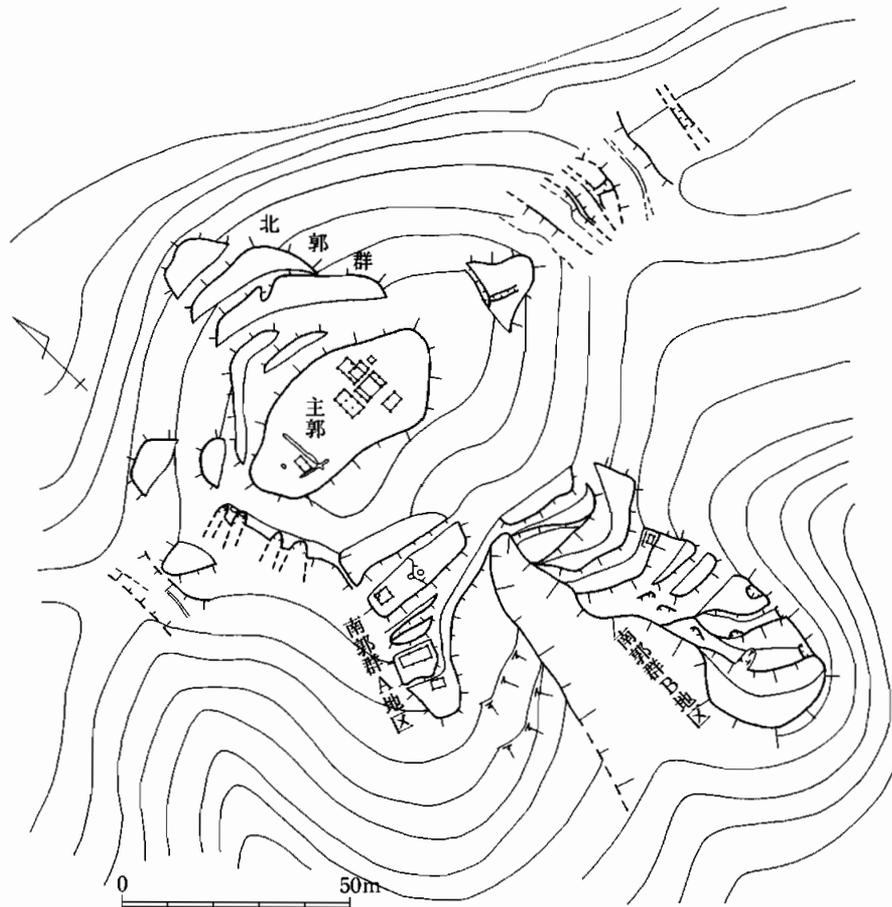


図2 宗高尾城跡の曲輪配置図

跡 丹波尾城跡 - 発掘調査の概要⁽²⁾』としてまとめられている。因みに、宗高尾城跡一帯は発掘調査終了後、直ちに区画整理のため削平され、昔日の面影は何も留めていない。

2. 地鎮にともなう遺構と遺物

〔遺 構〕

宗高尾城は標高93mの山頂を中心に、尾根づたいに連なる郭（曲輪）群と堀切などで構成された山城である（図2）。主郭となる山頂には東西約50m、南北約26mの卵形をした平場が形成され、大小の掘立柱建物数棟など城郭に伴う遺構が配置されていた。今ここで取り上げようとする遺構は、この平場の西端部中央から検出された土坑でSK-1と命名されている（図3）。SK-1は結論から言えば、その形態と埋納遺物から見て地鎮にともなう遺構になろう。ただし、SK-1は平安時代末期から鎌倉時代にかけてのものとして推定され、山城にともなうものではなく、築城以前に造られたものと考えられる。おそらくSK-1にともなう建物などの施設が周辺にあったのであろうが、築城にあたって大幅に平場が削平されるなどしたため、SK-1にともなう施設はことごとく痕跡が残らないまでに破壊され、地中に穿たれたSK-1だけがかろうじて残ったものと思われる。

SK-1（図4・9）は、一辺の長さが1m前後の南北軸にやや長い隅丸状の方形を呈す。その構造は、まず全体が15cm～20cmの深さに掘られ、さらに土坑の中央部と東西南北四辺中央5つの穴を掘り窪められた二重構造になっている。中央部に穿たれた土坑は南北50cm×東西20cmの長楕円形を、東西南北四辺中央の土坑は直径20cm～25cmの略円形を呈し、それぞれの深さは10cm～15cmである。

これら5つの土坑のうち中央土坑には青銅製花瓶と土師皿4枚が、他の東西南北4つの土坑には土師皿が5枚ずつ埋納されていた。中央土坑に納められた花瓶と土師皿の位置は、花瓶が中央土坑の真ん中に置かれるのではなく土坑の北端に置かれ、土師皿が中央に配置されていた。花瓶は正立した状態に置かれていたが、土師皿は整然と積み重ねられた状態ではなく、すべての土坑に共通して全体に雑然と広げられた状態であった。中には2枚重なったものや側面を上にして立ったものもあり、丁寧に埋められたという印象はない。そして、以上のように方形土坑に花瓶と土師皿が一定の法則に則って埋め戻されたのち、方形土坑の四隅に小型土師皿が2枚ずつ重ねられて配置されていた。

このような花瓶と土師皿の配置と埋納は、ある意味で特殊であり、明らかに何らかの祭祀法則に則ったものである。それが宗教的な施設にともなう鎮壇遺構か、またはある一定の土地を鎮めるための地鎮遺構なのか、それを明らかにする物的証拠が検出されておらず特定できないのが実情である。しかし、SK-1が置かれている位置が、海側から尾根づたいに山頂に登り詰めた所、つまり山頂の東端部に位置しているところ鑑みて山頂を前にして地鎮めを行った祭祀＝地鎮祭祀の遺構と見てよいだろう。

〔遺 物〕

青銅製花瓶（図5-33・10・11）

この花瓶（賢瓶）はいわゆる「垂」字形を呈し、垂字形花瓶と呼ばれるものである。出土した時には蓋がなかったが、内部に土が詰まっていなかったことから、本来木製の蓋がされていたと推定される。また、金剛峰寺大門出土花瓶のように5色の紐をかけた痕跡は見られなかった。

花瓶は、口径3.8cm、胴径5.5cm、脚径4.8cm、器高9.6cmをはかり、遺存状態がたいへん良い逸品である。口縁部は垂直な外面をつくり、その上端と下端に沈線状の段を有す。口唇部は肥厚し、上端はわずかに内傾する面をもつ。頸部は直立し、その中央に2条の突帯（紐飾り）をもつ。胴部は高さのない寸詰まりの琵琶形に近い球形を呈し、

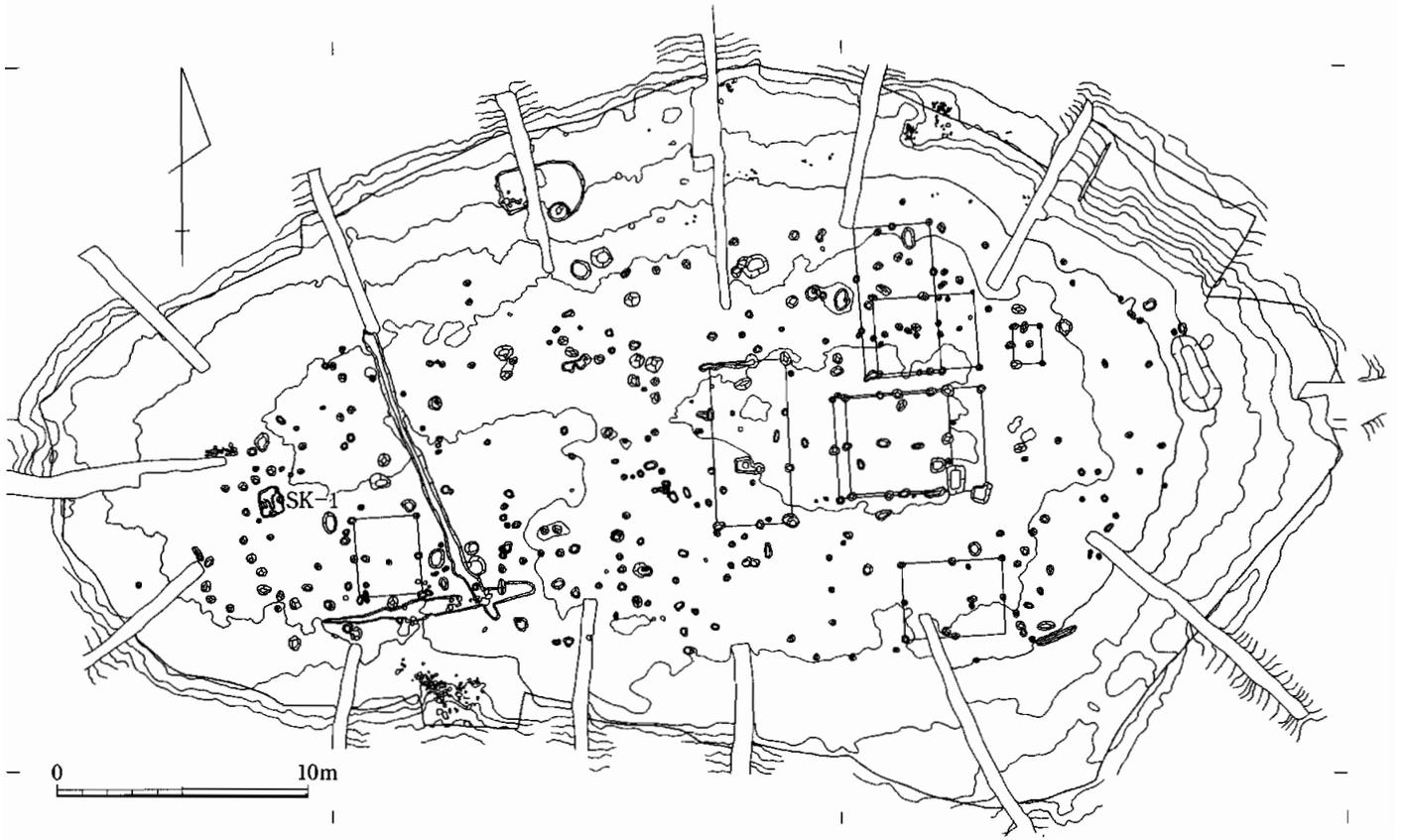


図3 宗高尾城跡主郭部の遺構配置図

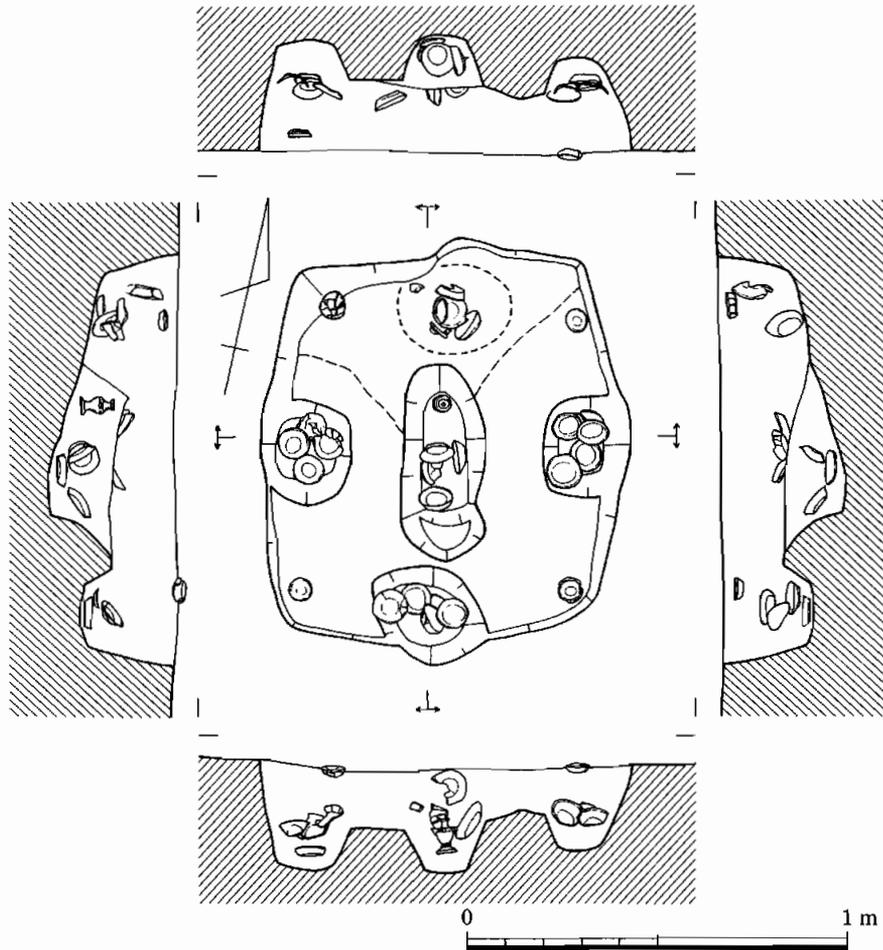


図4 SK-1 地鎮遺構図

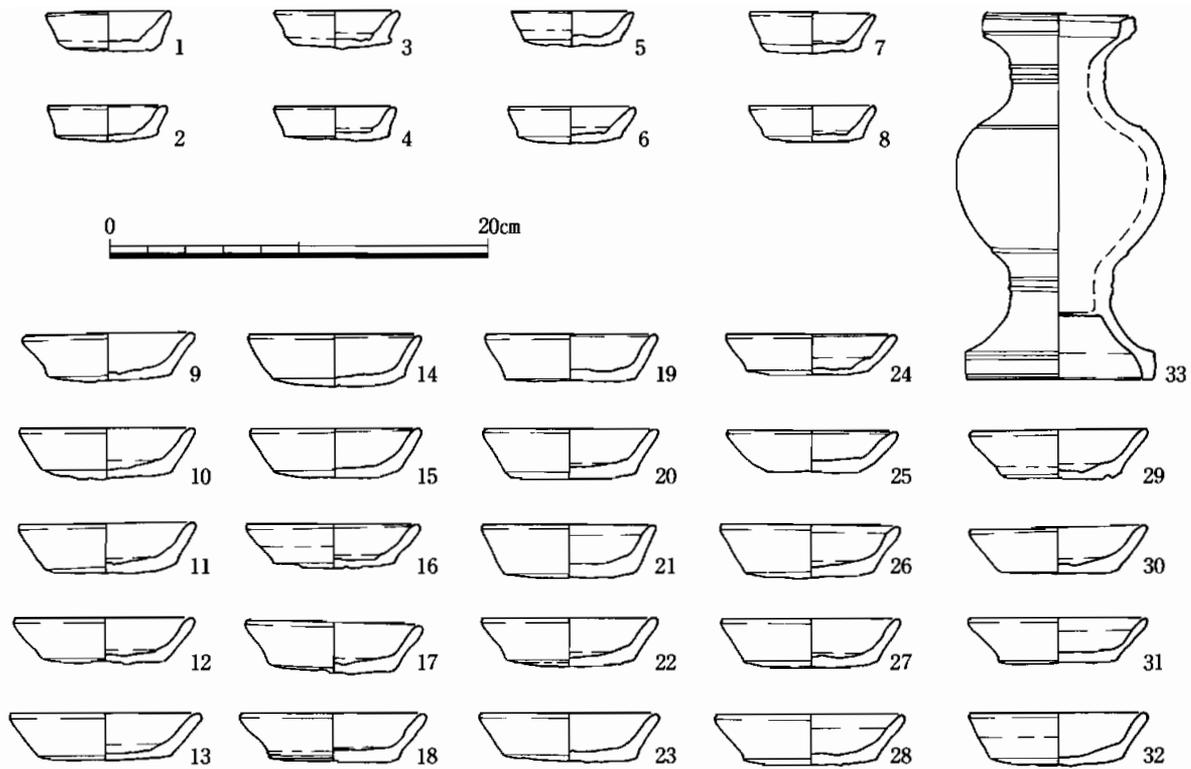


図5 SK-1出土土師皿と青銅花瓶（花瓶の縮尺は1/2、土師皿は1/4）

その上部（肩部）と下部に圈線状の段がめぐる。脚柱部（腰部）は、頸部同様、胴部に向かって直立し、その中央に2本の突帯（紐飾り）がめぐる。脚裾部も口縁部同様、ハの字に開き、端部が肥厚し、垂直な外面を有し、その上端と下端に沈線状の段をめぐらす。胴底には底板をもつ。

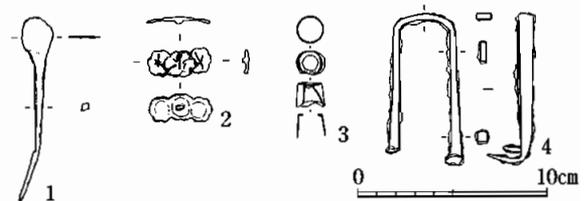


図6 宗高城跡出土金属製品

花瓶の中には、真珠、瑪瑙、瑠璃、水晶、金箔、粉殻

などが紙と共に納められていた。供養壇法を記した『佛説陀羅尼集經』⁽³⁾には壇法に用いた品が記されている。『卷第四』には「一金二銀三真珠四珊瑚五琥珀」の五寶と「一大麦二小麦三稻穀四小豆五胡麻」の五穀が、『卷第十二』には「一金二銀三真珠四珊瑚五虎珀六水精七瑠璃」の七寶と「一大麦二小麦三稻穀四小豆五胡麻」の五穀があげられており、これら五寶五穀、七寶五穀の寶を碎き五穀に混ぜて5つの孔に埋めるとしている。花瓶から検出されたものは『佛説陀羅尼集經』に記された寶穀に一致している。おそらくそれに準じた五寶・五穀・五香・五薬などが用意され、それらを紙に包んで花瓶に埋納したものと思われる。

垂字形花瓶は密教に欠かせない法具の一つとされ、五寶・五穀・五香・五薬を入れて浄水を盛って壇の四隅などに配置されて用いられる。そのため伝世されることを常とするが、その数はそう多くはない。また、経塚や墓などに埋納されたり、山岳信仰で使用されたのち遺棄されたものが発掘によって出土しているものの、これとて多くはない。ある程度まとまって掲載されているものとしては、現在のところ、奈良国立博物館監修の『密教法具』⁽⁴⁾に1点もの34個と5個一組のもの2組の36個が写真と実測図でもって集成されているのを唯一とする。ただしこれにすべてが掲載されているわけではなく、これに漏れているものや後に出土発見されたものを含めたとしても、その数はおそらく倍以上にはならないであろう。数量の少ないことに加えて、紀年名の刻されたものが少なく製作時期を特定しにくいこともあって、今のところ系統だった編年は行われていないのが実情のようだ。ただ、大まかな時代

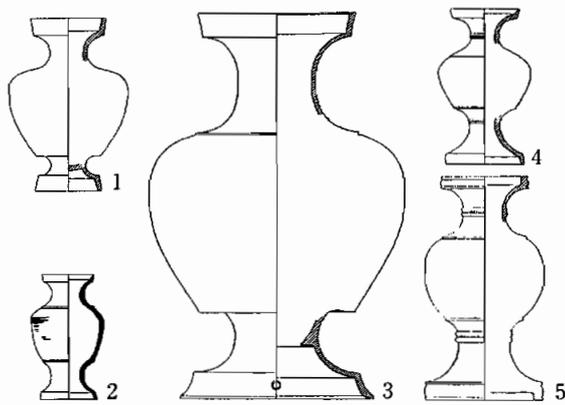


図7 亜字形花瓶形態 S = 1/4

(1 : 修禪寺 2 : 日光男体山 3 : 朝護孫子寺)
(4 : 那智経塚 5 : 西大寺)

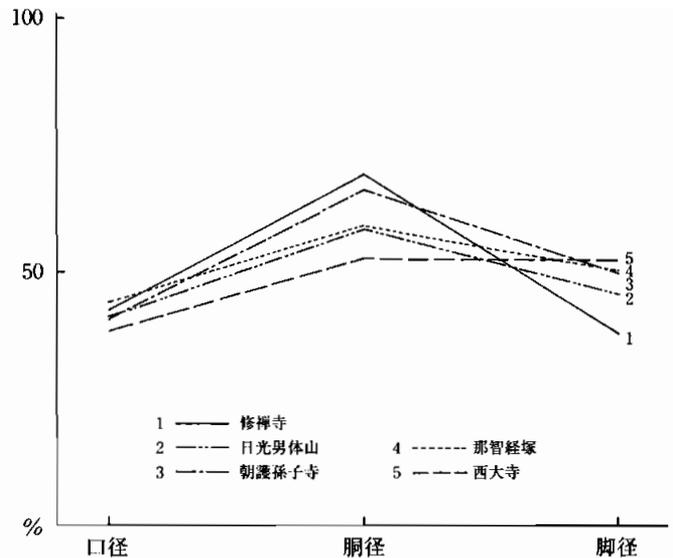


図8 亜字形花瓶の口径・胴径・脚径の対比

的特徴について岡崎譲治氏は「古いものは口が広く、肩が張り、首と腰の締った器形を保ち、また首と腰の紐飾りが細く、全体に薄手の鑄製であり、底板のない⁽¹⁵⁾」とし、鎌倉時代以降になると「総体に厚手の鑄造となり、高さに比して口の開きが小さく、全体に丈高で首や腰が太く作られてくる。また銅板の底板を用いるようになる⁽¹⁶⁾。」と説かれているものの、亜字形花瓶の製作開始時期やその変遷、消長などは追究されていない。

そこで、おおむね年代順に掲載されている奈良国立博物館監修の『密教法具』掲載資料を中心に一定の方向性をもたせて4期に編年し、宗高尾出土花瓶の年代観について若干触れてみたい。ただし、室町期以前を対象とし、それ以後は考慮しない。

I 期

静岡県の修禪寺裏山墓地出土資料(図7-1)を基準とする。現在のところ最も古いものと考えられているが、同型式のものは他に見つからない。主な特徴は、

- ①器厚は口縁部から脚部まで一定である。
- ②胴部は逆台錐形を呈し、底部は水平である。
- ③最大径が胴部の肩にあって肩が張り、高さも全高の半分以上あり、口頸部と脚部の大きさに対し胴部の占める割合が大きい。
- ④脚部は、脚裾径が口径よりも小さく、全体に矮小で不安定である。
- ⑤口縁部外面と脚部外面、頸部、脚柱部(腰部)、胴部に沈線や紐飾りなどがなく、素紋である。

があげられる。

II 期

奈良県朝護孫子寺所蔵資料(図7-3)と栃木県日光男体山二荒山神社出土資料(図7-2)⁽⁷⁾をあてる。その特徴は、

- ①器厚などはI期と同じく一定であるが、口頸部、脚部共に高さと太さを増し、長大化の傾向が見られる。
- ②脚裾径が口径と同じか、やや大きくなり、安定感が出てくる。
- ③胴上部(肩部)に段圏線をめぐらす。二荒山神社出土資料には胴の下部=脚部との付け根にも段圏線をめぐらしてあり、紋様化の傾向が出てくる。

のように新しい要素が取り入れられる。事例が増えれば2小期に分けられるかもしれない。



図9 SK-1 地鎮遺構検出状況



図10 SK-1 出土遺物のすべて

Ⅲ期

飛躍的に数を増し、全体の形態に定形化が見られる。その代表に和歌山県那智経塚出土資料（図7-4）を掲げておく。その特徴は、

- ①口頸部、胴部、脚部の高さがほぼ三分するが、脚部がやや勝る。脚部の肥大化が顕著に認められる。
- ②胴部の上部（肩部）と下部（底部）の段圏線が強調される。

③胴部の逆台錐形の形が丸味をおび、球形に近いものが表れる。

④頸部と脚柱部（腰部）に2条の突帯（紐飾り）がめぐらされ、装飾化が進む。

⑤全体の器厚は一定のものが多いが、口縁部が肥厚するものもある。

と、Ⅲ期は定形化される段階に位置づけられる。

Ⅳ期

事例に正和3（1314）年の銘が刻まれている奈良県西大寺蔵の資料（図7-5）を掲げる。Ⅳ期も形態的にはⅢ期の特徴を踏襲するが、つぎのような特徴が顕著になる。

①口縁部と脚裾部が肥厚するものが増える。

②口縁部と脚裾部の上下端に1条ずつ段もしくは沈線がめぐらされる。

③口頸部頸と脚柱部（腰部）などに八葉蓮弁や珠紋を飾り、装飾化を一層進めたものが増加する。

④脚部の肥大化がより一層顕著となる。脚径が口径を上回り、脚柱部（腰部）も頸部より太く、口頸部に対して脚部の大型化が著しく、ずっしりとした安定感をもつ。図8は、Ⅰ～Ⅳ期に相当する花瓶の口径、胴径、脚径を高さで割った比率を比

べたグラフであるが、新しくなるにつれて脚径が胴径に近づき、ついにそれを上回り、脚部の肥大化していくことがわかる。

このⅣ期の段階は装飾化が著しく発達するとともに、脚部の肥大化が著しい時期と位置づけられる。また、この時期には紀年銘の刻まれた花瓶あるいは同伴品の紀年銘などから年号のわかるものが存在する。その年代は、13世紀末～14世紀初頭（1300～1314年）と15世紀前葉（1439～1441年）の二時期があり、前者は鎌倉時代後期に、後者は室町時代にあたる。この二者はどちらも形態的にはよく似ているが、どちらかというとも後者は肩の張りがなくなり、胴部がラグビーボールの両端を切り取ったような形を呈し、つぎへの規格化の兆しが見受けられる。

以上のように垂字形花瓶を4期に型式分類したが、実年代の手掛かりが得られたのはⅣ期だけである。現在のところ、得られた最も古い年代が1300年であり、Ⅳ期がそれをどこまで遡りうるのかは不明である。各時期の年代についての考察は別の機会に譲るとして、つぎに宗高尾出土花瓶の年代観を見てみたい。宗高尾の花瓶の形態的特徴は前述したように、

①口縁部と脚裾部が肥厚し、外面上下端に段状もしくは沈線がめぐる。

②頸部と脚柱部（腰部）に2条の突帯（紐飾り）がめぐる。

③胴部の上部（肩部）と下部（底部）に段状の圈線がめぐり、球形に近い形態を呈す。

④頸部と脚注部（腰部）が太く、脚裾径が口径に勝る。

といった特徴を具えている。この特徴はまさしくⅣ期の特徴に一致する。しかし、その形態は室町期よりも鎌倉期の特徴に近い観がある。詳細についてはさらに追究しなければならないが、それは今後の課題としてここではその



図11 SK-1出土垂字形花瓶

製作時期を鎌倉時代の範疇で捉えておきたい。⁽⁸⁾

土師皿（図5-1～32・10）

SK-1から出土した土師皿は、土坑が埋め戻されたのちに土坑の四隅に置かれたものと、土坑内に埋納されたものと、大きさによる使い分けがされている。前者は小型品8枚（1～8）で、後者は大型品24枚（9～32）である。小型品の大きさは、口径が6.3cm前後、高さが2cm前後をはかり、大型品は口径が9cm前後、高さが2.5cm前後である。その製作技法や形態の特徴は小型品と大型品共に同じで、全体に肉厚でぼつりとした作りである。底部切り離しは全てヘラ切りで、内外面共に横ナデされ、口縁部は丸みをもつ。

青銅製薬匙（図6-1）

遺構に伴っていないが、山頂の平場周辺からSK-1に関連したと思われる遺物が検出された。その一つに青銅製薬匙がある。おそらく密教法具の一つとして使われたものであろう。全長9.5cm、皿部は厚さ0.3mmで1.8cm×1.6cmの楕円状を呈し、柄部は尻尖りの方形に作られている。

その他にも青銅製の飾り金具（図6-2）や青銅の円錐台形をした鐸状品（図6-3）、用途不明の鉄製品（図6-4）などの金属器が出土している。これらも包含層出土のため、その性格や時期などは不明であるが、おそらくSK-1に関連した可能性が高い遺物として捉えられよう。

〔小 結〕

以上に記したSK-1の地鎮遺構、遺物に鑑みて、今のところ宗高尾山に戦国時代の山城が築かれる前、山岳信仰＝修験に関連した山岳寺院が祀られていたものと推察される。その時期については、花瓶の特徴から鎌倉時代に考えられるが、花瓶が伝世されたものとするならば、土師皿の年代が地鎮遺構の時期を決定することになろう。花瓶に共伴した土師皿は、現在のところ当該地域での編年が進んでいないこともあって、土器からの時期比定は難しい状況にある。その土師皿が花瓶の製作時期に一致するのか、それより新しい時期に位置づけられるのか、将来の研究を待たねばならないが、ここでは漠然と鎌倉時代に捉えておく。（浅岡俊夫 藤田広幸）

3. 宗高尾山の地鎮資料について

宗高尾山の尾根上西よりで城塞築城以前とおぼしき遺構と遺物が発見されている。調査概要報告書に遺構配置図が掲載されているがその遺構配置図のSK-1にあたる場所から地鎮資料と推定される遺物が見つまっている。その主な出土資料としては花瓶、薬匙、土師器の皿などであるがそれらは一定の間隔を置いて整然と配置されており地鎮の儀式に伴って埋納された資料であることを物語っている。

概要の報告者はこの地鎮具の時期を鎌倉後期と推定しているなのでその推定時期を信じて以下考察を加えてみよう。

出土資料としては5方に掘られた穴より4～5枚の組になった土師器の皿と四隅に2枚ずつ8枚の小皿、中央の穴よりは青銅製の垂字形花瓶が発見されている。花瓶からは正確な分析を待たないとわからないが、真珠・メノウ・瑠璃・水晶・金箔・初殻などが紙にくるんだ状態で収められていた。

これは明らかに地鎮のために埋納された鎮め物で花瓶を地鎮法では賢瓶と呼んでこの瓶の中に5室・5穀・5香・5葉の20種物を納める。

ところでこうした地鎮法は密教による儀式にのっとって行われているが、当時の密教は台密と東密の2派の流れがそれぞれ法流を競っていたから、宗高尾山の資料はこのどちらかということになる。

歴史地理的な立地から言えば巖島神社の北方にあたり、平氏が神社を復興している時期と重なるとするならば台密の影響が大きいとも考えられるが、地鎮に賢瓶を用いるのは台密の安鎮法にはみあたらない。しかも台密で用いられる輪宝や楯がみられないことからして東密の小野流による地鎮法の資料と推定される。

小野流による地鎮は詳しくは「地鎮」と「地鎮鎮壇」の二法にわけられ、「地鎮」は敷地内に未だ堂塔の基壇を築かず普請をしない前に土地神に供養法を行う作法であり、「地鎮鎮壇」は堂塔の基壇を造って床板を張る直前に修する作法で後世にはこの両法を併せ行う「地鎮鎮壇合行の法」が一般的に修法されている。「地鎮」法は建設予定地に帷屋を作りその内で行ずる。この作法の要点は鎮所の中心に瓶を埋め、五方に五色の玉を埋める。これにたいして「鎮壇」は基壇の八方に八輻輪と楯を埋め、瓶玉は埋めない。

宗高尾遺跡の例では瓶は発見されているが八輻輪などは発見されていないことからして、尾根の西端より尾根の主要部である「東方」全体に向かって如法に祈願された「地鎮」の遺構と推定される。

儀軌によれば賢瓶の中には五宝—金・銀・瑠璃・真珠・水晶 五香—沈香・白檀・竜腦・鬱金・丁子 薬種—人參・天門冬・石菖蒲・赤箭・伏苓（遠志・苟杞） 五穀—稻穀・大豆・小豆・大麦・小麦（胡麻・菽豆）をそれぞれ紙に包んで納める。

ところで宗高尾遺跡では賢瓶を取り巻いて5つの土師器の皿を納めた穴と四隅に二枚あわせの皿を納めた穴が発見されている。この穴の意義については多分にこの遺跡で修法を修した阿闍梨の意楽によるところが多いので確かな解釈はできないが、五方に五丸石を納め汁（小豆汁）・餅・菓・白飯などを土師器の皿に盛って供養したものでないかと推察される。白飯を中心に餅と汁を1対にした指図を参考に掲げたが1つの穴から5枚の土師器の皿が出土しているのによく対応している。

ところでここに言う五丸石（五色玉）とは曼荼羅の五仏もしくは五方神を表したもので青（瑠璃）・黄（琥珀）・赤（赤珠）・白（水晶）・黒（黒石）の5色で合計25個を必要とし、玉が得難いときは石を五色に染めてもよいとされている。ただこの石を五方の穴に納めたかもっと広く敷地の五方に納めたか資料が発見されていないので決めることは出来ないが「地鎮」の修法の通り如法に修されておれば遺跡のどこかに埋納されていた可能性はあるが色を染めた人為的な石でも発見されない限り土砂中の石との分別は容易ではないので捨てられた可能性が大きい。

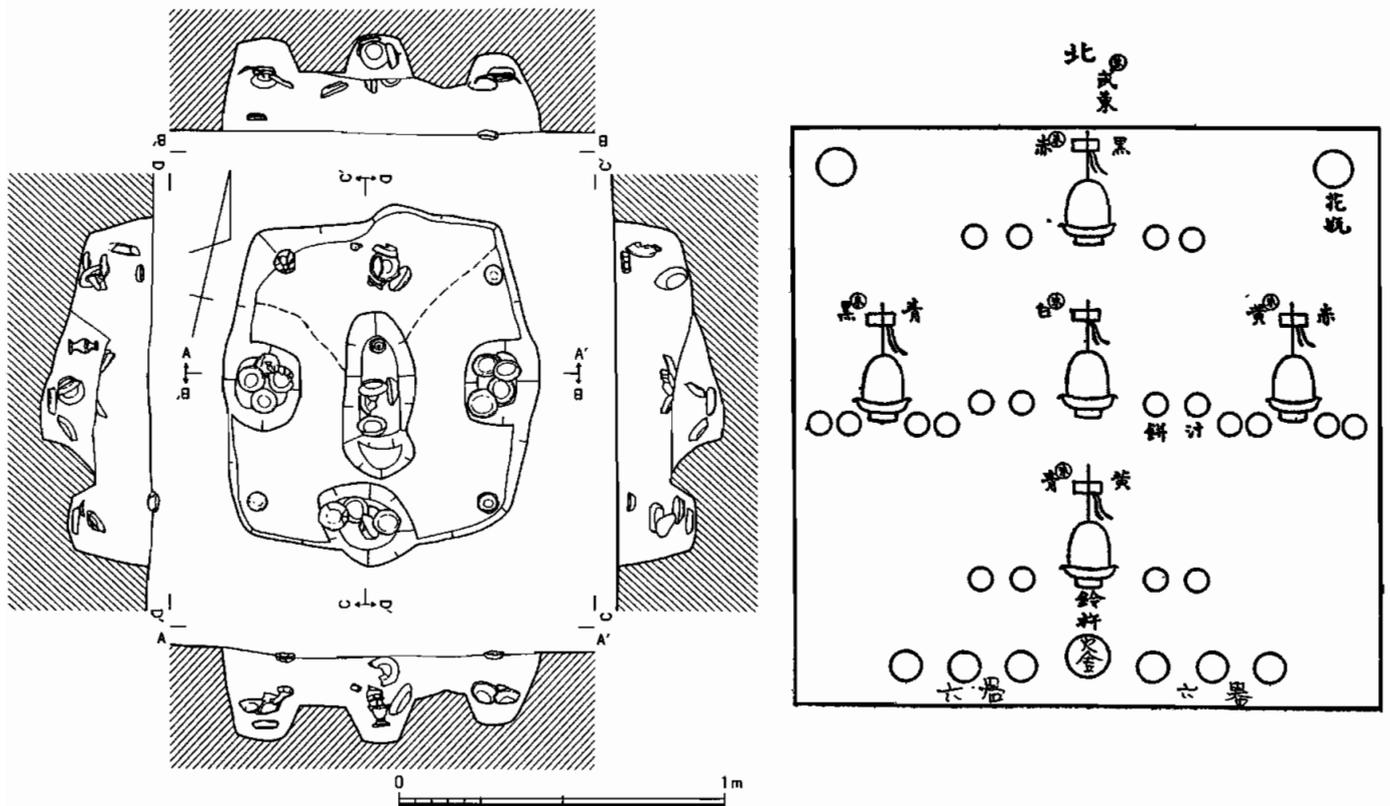


図12 SK-1（左）と西院八結地鎮指図（右）



図13 三宝院憲深方 洞泉相承伝授録 八結 第五 覺禪鈔

宗高尾遺跡は出土遺物の性格から「地鎮」の儀式を物語る資料と結論づけられるが、「地鎮鎮壇」とは区別することのできる大変珍しい遺跡である。それとともに地鎮の儀式は寺院建築に伴う作法で、後世の城塞築城以前にこの地に何らかの堂舎が建立されていたものと推定される。

中世の地鎮作法を如実に物語る資料として注目に値する遺跡である。

4. 賢瓶および賢瓶納入物の科学分析

賢瓶は表面が黄緑色の錆に覆われているものの保存状態は極めて良好である。賢瓶内には微小な金属・鉱物・種子・紙などが粒状あるいは塊状の状態で残存している。これらのうち金属・鉱物の組成成分分析を行ったので報告する。

分析には、奈良大学設置のエネルギー分散型蛍光X線分析装置（エダックス社製イーグルXXL-NR）を使用した。分析条件は、電圧：20～30Kv、電流：450～600 μ A、ターゲット：クロム、分析スポット：100 μ m^φ、雰囲気：真空、分析時間：100～200秒である。ただし、エネルギー分散型の蛍光X線分析装置による元素の定量分析は若干の誤差を含んでいる。

（1）賢瓶

賢瓶は全面が黄緑色の錆に覆われている。分析は肩部の錆の少ない部分5か所を選びおこなったがそのうちの比較的良好的なデータ3か所を下記に示す。

賢瓶の表面3か所の分析では、銅（Cu）、鉛（Pb）、鉄（Fe）、錫（Sn）、ケイ素（Si）のほか、微量の銀（Ag）、アルミニウム（Al）、砒素（As）、リン（P）、カルシウム（Ca）を検出した。この結果から、賢瓶は銅と鉛に微量の錫を混入した合金により鑄造されたものであることが判明する。金・水銀が検出されないことから、金鍍金などによる表面装飾はなされていない。鉄とケイ素は埋蔵中に付着した土壌の成分であろう。

試料	検出元素および含有量(%)											
	Au	Ag	Cu	Fe	Pb	Sn	Hg	Al	As	P	Si	Ca
1	—	(t)	77.0	2.8	11.4	3.4	—	—	(t)	(t)	5.4	(t)
2	—	—	67.8	4.7	19.6	2.2	—	(t)	(t)	(t)	5.7	(t)
3	—	(t)	78.6	3.2	18.2	(t)	—	(t)	(t)	(t)	(t)	(t)
平均	—	(t)	74.4	3.6	16.4	1.9	—	(t)	(t)	(t)	3.7	(t)

（2）賢瓶納入物

① 金色の粒

金属・鉱物・種子・紙などの塊の中に直径2mmほどの金色の粒が含まれている。分析の結果、金（Au）・銀（Ag）・銅（Cu）・鉄（Fe）・カルシウム（Ca）を検出した。銅は賢瓶、鉄・カルシウムは土壌の影響と考えると、金40.3%と銀9.8%の比は4：1となり金の純度は80%、19金となる。

② 金色の箔

紙・鉱物などの塊の中に1.5mm×1mmの金箔様のものがある。分析の結果、金（Au）・銀（Ag）・銅（Cu）・鉄（Fe）・鉛（Pb）・ケイ素（Si）・カルシウム（Ca）・チタン（Ti）を検出した。銅と鉛は賢瓶、鉄・ケイ素・カルシウム・チタンは土壌の影響と考えると、金55.2%と銀5.7%の比は9：1となり金の純度は91%、21～22金となる。金箔であろう。同様の金箔は、他の納入物の塊や③の表面にも付着している。

③ 緑色の小玉

直径3mmほどのうすい緑色の小玉で、銅玉かと思いがうものである。分析の結果、銅（Cu）・鉛（Pb）・カルシウム（Ca）・硫黄（S）・イットリウム（Y）を検出した。銅と鉛は賢瓶の影響と考えると、カルシウムがほとんどを占める。真珠であろう。

④ 白色の小玉

直径3mmほどの白色の小玉で、表面の一部に薄い層状の剥落が見られる。分析の結果、銅（Cu）・ケイ素（Si）・カルシウム（Ca）・イットリウム（Y）を検出した。銅は賢瓶、ケイ素は土壌の影響と考えると、カルシウムがほとんどを占める。真珠であろう。

⑤ 白色の小玉

金属・鉱物・種子・紙などの塊の中に直径2mmほどの白色の小玉が含まれている。分析の結果、銅（Cu）・カルシウム（Ca）・チタン（Ti）・イットリウム（Y）を検出した。銅は賢瓶の影響と考えると、カルシウムがほとんど

を占める。真珠であろう。

⑥ 透明で不整形な鉱物

表面に茶色の汚れが付着しているが透明性の高い4mm×3mmの大きさの鉱物である。分析の結果、銅 (Cu)・ケイ素 (Si)・カルシウム (Ca)・チタン (Ti) を検出した。銅は賢瓶の影響、カルシウムとチタンが土壌の影響と考え、ほぼケイ素100%の鉱物である。水晶であろう。

⑦ 透明で不整形な鉱物

表面に汚れが付着しているが透明性の高い2mm×2mmほどの大きさの鉱物である。分析の結果、銀 (Ag)・銅 (Cu)・鉄 (Fe)・ケイ素 (Si)・カルシウム (Ca)・カリウム (K)・アルミニウム (Al)・硫黄 (S)・チタン (Ti) を検出した。銅は賢瓶の影響、鉄・カリウム・アルミニウム・カルシウムは土壌の影響と考え、ほぼケイ素100%の鉱物である。水晶であろう。

⑧ 透明で不整形な鉱物

紙・鉱物などの塊の中に、表面に黒い汚れが付着しているが透明性の高い1mm×1mmほどの微細な鉱物がある。分析の結果、銀 (Ag)・銅 (Cu)・鉄 (Fe)・ケイ素 (Si)・カルシウム (Ca)・カリウム (K)・アルミニウム (Al)・硫黄 (S)・チタン (Ti) を検出した。銅は賢瓶の影響、鉄・カリウム・アルミニウム・カルシウムは土壌の影響と考え、ほぼケイ素100%の鉱物である。水晶であろう。

⑨ うす青色半透明長方形の物質

表面に汚れが付着しているがうす青色半透明の1mm×0.5mmの大きさで、一部に銀化現象が見える微細な物質である。分析の結果、銅 (Cu)・鉄 (Fe)・鉛 (Pb)・ケイ素 (Si)・カルシウム (Ca)・カリウム (K)・アルミニウム (Al) を検出した。ケイ素を主としてカリウム・カルシウムを含み、銀化現象が見えることから、アルカリ石灰ガラスと思われる。

⑩ 不透明な青い鉱物

金属・鉱物・紙などの塊の中に1.5mm×1.5mmほどの青色の玉石様のものが含まれている。分析の結果、銅 (Cu)・鉄 (Fe)・鉛 (Pb)・ケイ素 (Si)・カルシウム (Ca)・カリウム (K)・チタン (Ti) を検出した。元素分析ではケイ素42.5%・鉛37.7%、酸化状態での分析ではケイ素70.7%・鉛17.9%を計り、天然鉱石かガラスかの判断は難しい。表面観察では、⑧の様な銀化現象は見られず玉石のように思われる。

⑪ 褐色の細粒の物質

鉱物・種子などの微細な粒の中に褐色半透明の0.5mm～2.0mmの小片がある。分析の結果、銅 (Cu)・珪素 (Si)・カルシウム (Ca)・アルミニウム (Al)・硫黄 (S) を検出したが、中でも硫黄を70%含む特異なデータを得た。薬香の一種であろうか。

⑫ 褐色の細粒

褐色半透明の2.0mmの玉片様の小片で⑪と酷似する。分析の結果、銅 (Cu)・鉄 (Fe)・珪素 (Si)・カルシウム (Ca)・アルミニウム (Al)・硫黄 (S)・チタン (Ti) を検出したが、硫黄を65%含む特異なデータを得た。薬香の一種であろうか。

⑬ 穀物の殻

植物の種子や茎・枝の断片がいくつもある中に、稲の籾殻と思われるものがある。⑬はその一つで、残存の長さ3mmを測り籾殻の1/3程度が残っている。ほかにも稲の籾殻の残片がいくつかある。

⑭ 種子類の塊

一辺10mmほどの穀類の種子の塊である。長さ1.5mmほどの麦と思われる種子をはじめ、小さな種子類が見られるが、それらの表面を土壌がうすく覆っていて詳細は不明である。形体をよく保っているものの脆いが、慎重に汚れを除

去し拡大観察すれば、種子の種類が判別できそうである。

⑮ 植物の茎

長辺4mmほど、推定直径6mmほどの植物の茎と思われるものがある。表皮と皮層が外周に見え、内部には道管が不規則に散在している広葉樹である。香木または薬木であろう。

⑯⑰ 紙

金・水晶などの塊を包むように一面に紙が張り付いている。直径15~30μmの繊維がよく見える。⑬~⑰の植物の種子・茎や紙が良好な状態で残存するのは、銅製賢瓶の錆である緑青の殺菌作用によるものである。

今回、賢瓶納入物の分析で判明したものは、五宝では①②の金、③④⑤の真珠、⑥⑦⑧の水晶、⑨⑩の瑠璃である。銀が見当たらないが①⑤⑩を含む塊の中にある可能性もあるが真珠を銀に見立てている可能性もある。そうであるならば五宝は全てそろそろ。五穀では⑬の稲穀と⑭の麦(大麦か小麦かは不明)が確認され、さらに⑫⑮は五香または五薬に該当するものと考えられる。そして、五宝と五穀はそれぞれに紙で包まれている。

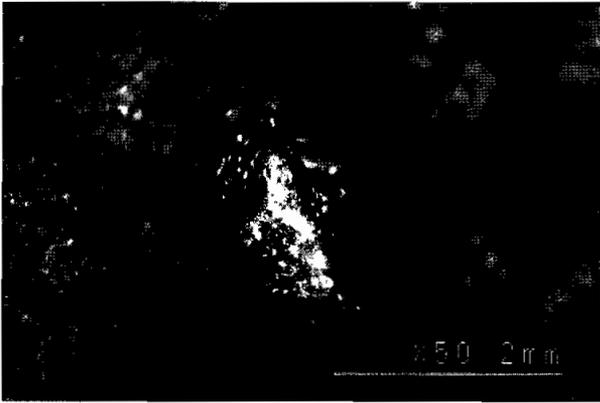
種子の同定等の調査をさらに行う必要があるものの、以上の調査結果から、本賢瓶・納入物が地鎮の作法に忠実に則ったことを示す極めて貴重な資料であるといえよう。

試料	検出元素および含有量(%)													備考
	Au	Ag	Cu	Fe	Pb	Hg	Si	Ca	K	Al	S	Ti	Y	
①	38.2	9.3	47.4	(t)	—	—	—	(t)	—	—	—	—	—	金
②	52.5	5.4	18.0	2.7	(t)	—	10.7	5.8	—	—	—	(t)	—	金
③	—	—	4.5	—	(t)	—	—	83.3	—	—	(t)	—	8.8	真珠
④	—	—	3.6	(t)	—	—	4.9	74.5	—	(t)	(t)	(t)	9.9	真珠
⑤	—	—	(t)	—	—	—	—	88.7	—	—	—	(t)	9.4	真珠
⑥	—	—	(t)	—	—	—	99.6	(t)	—	—	—	(t)	—	水晶
⑦	—	11.5	1.7	(t)	—	—	77.1	(t)	(t)	(t)	4.1	(t)	—	水晶
⑧	—	(t)	(t)	(t)	—	—	90.8	2.4	(t)	(t)	(t)	(t)	—	水晶
⑩	—	—	3.4	0.7	37.7	—	42.5	11.3	4.4	—	—	0.1	—	玉石?
⑪	—	—	(t)	(t)	—	—	13.0	(t)	—	9.9	70.8	—	—	薬香?
⑫	—	—	(t)	(t)	—	—	12.1	6.5	—	(t)	64.5	(t)	—	薬香?

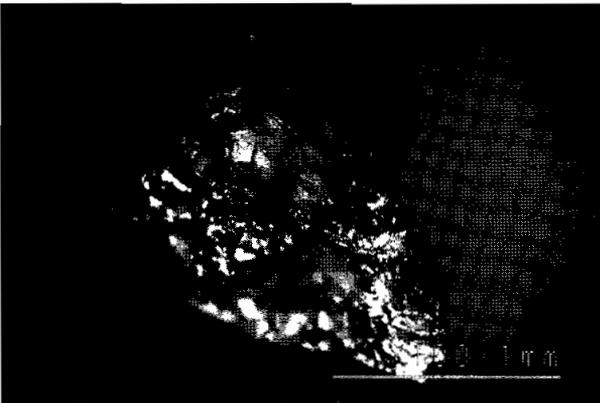
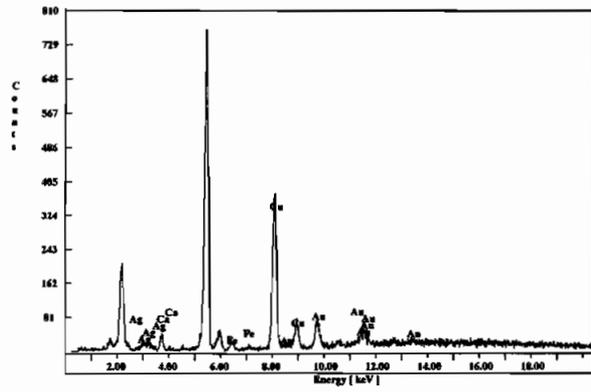
試料	検出元素および含有量(%)										備考
	Al ₂ O ₃	SiO ₂	AgO	Na ₂ O	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	CuO	PbO ₂	
⑨	11.9	56.4	—	—	3.7	11.7	—	1.3	7.6	7.5	青ガラス



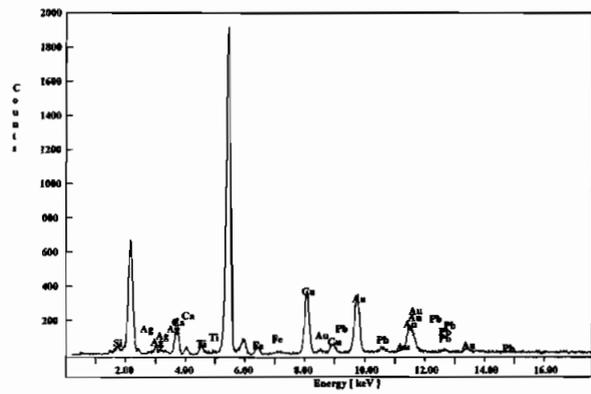
賢瓶納入品

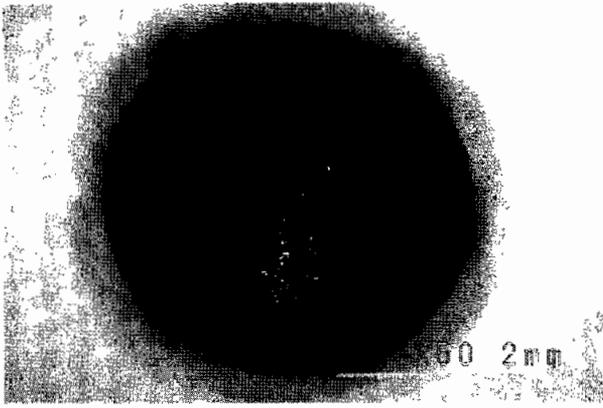


① 金粒

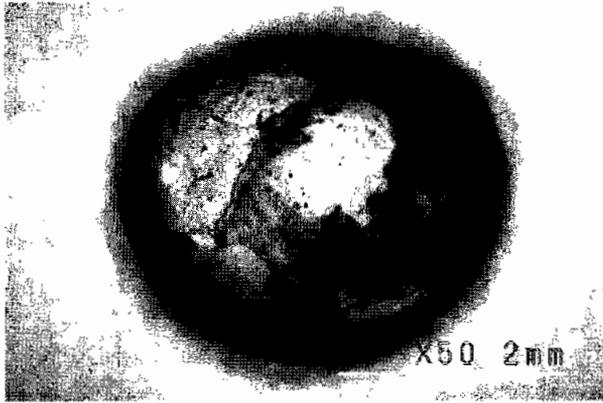
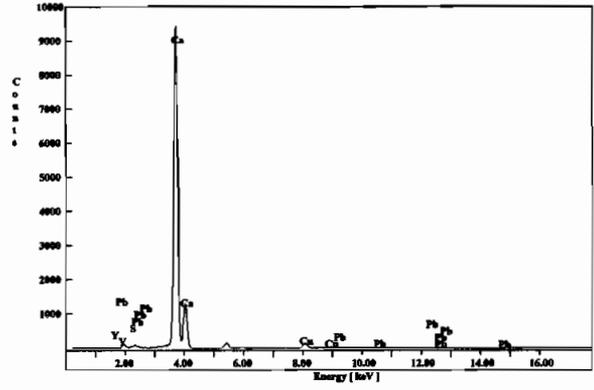


② 金箔

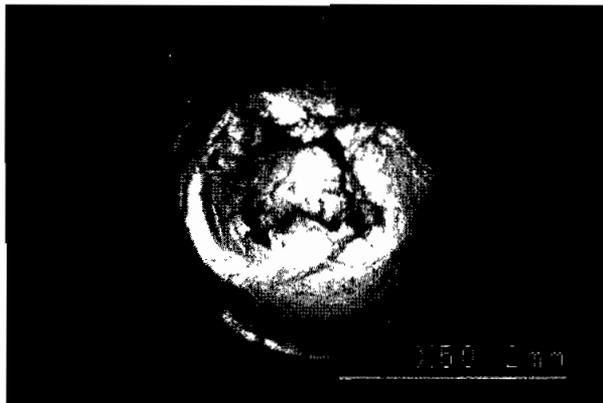
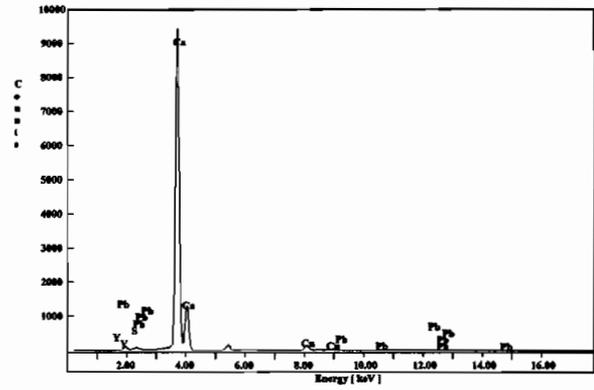




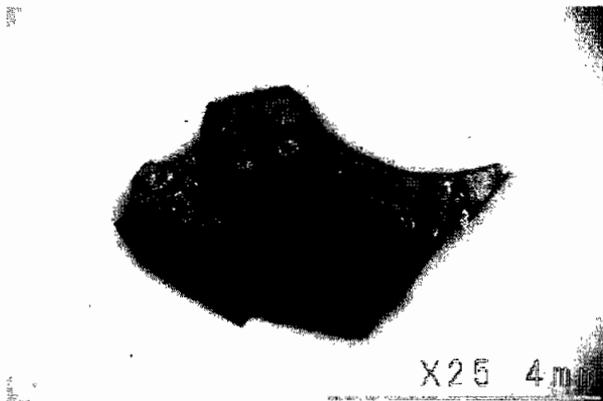
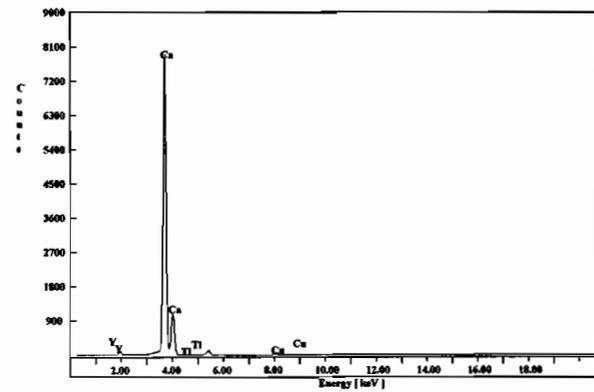
③ 真珠



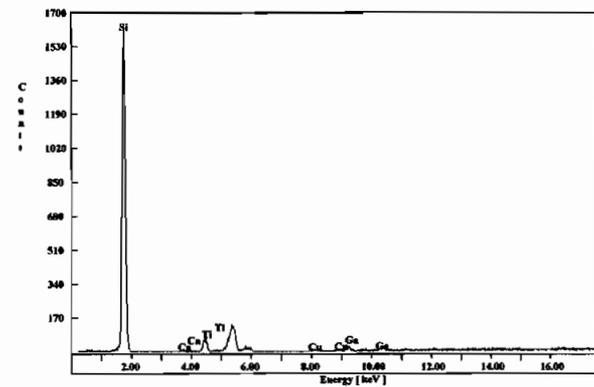
④ 真珠

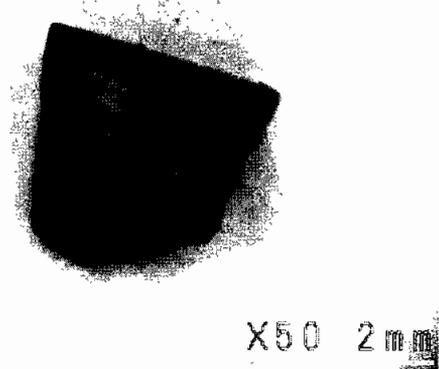


⑤ 真珠

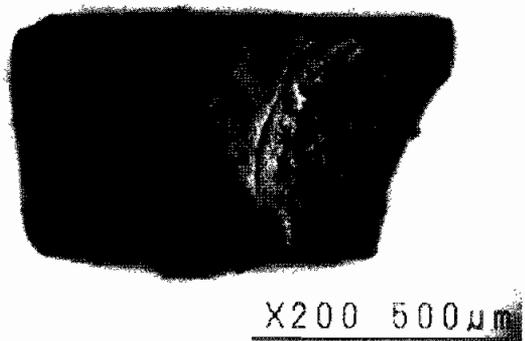
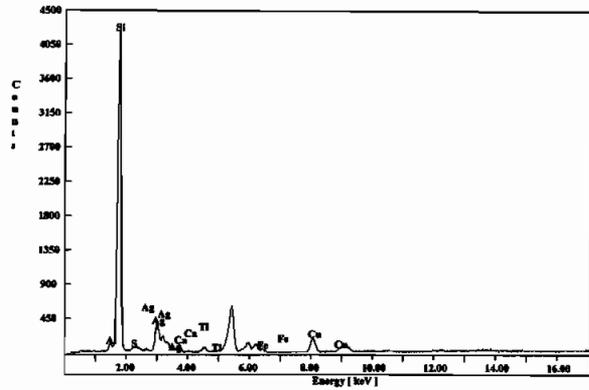


⑥ 水晶

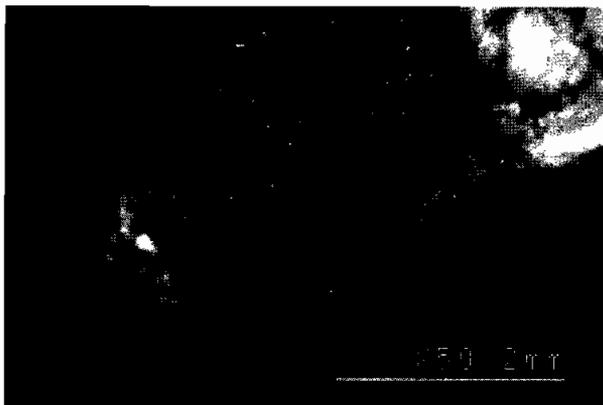
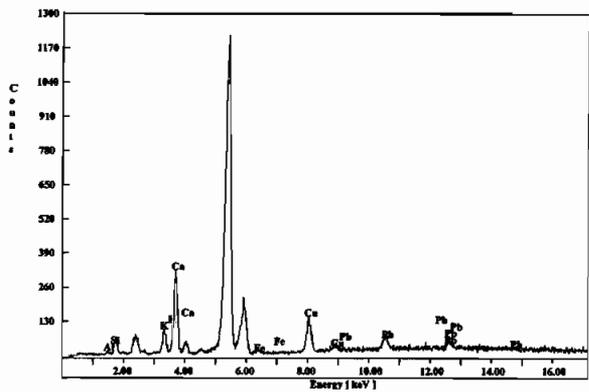




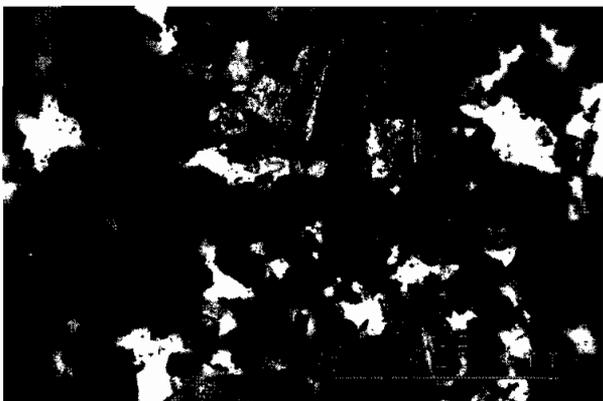
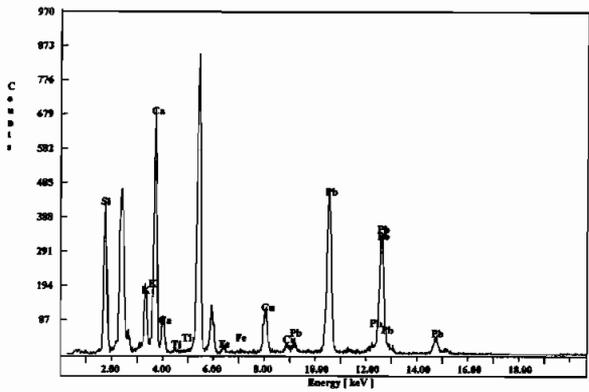
⑦ 水晶



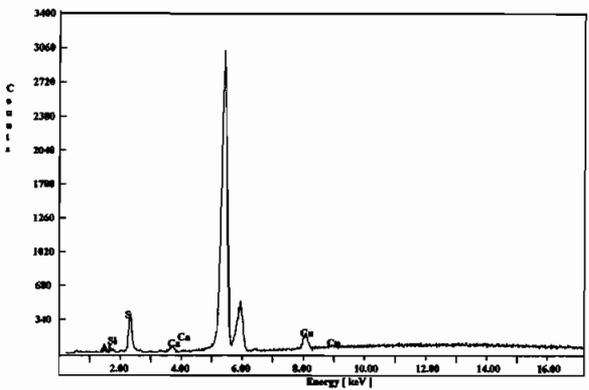
⑨ ガラス

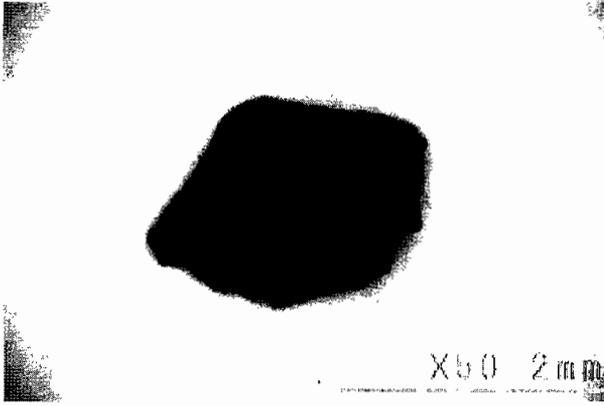


⑩ 玉?

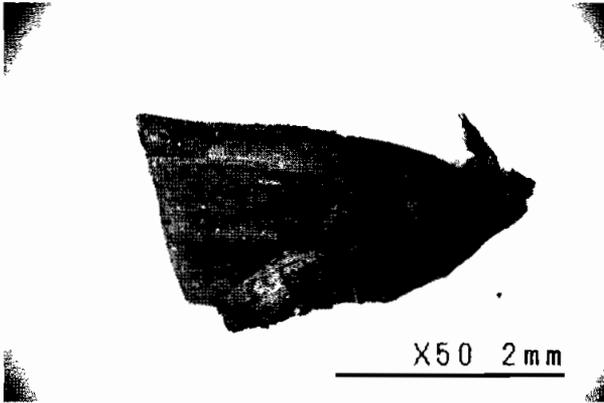
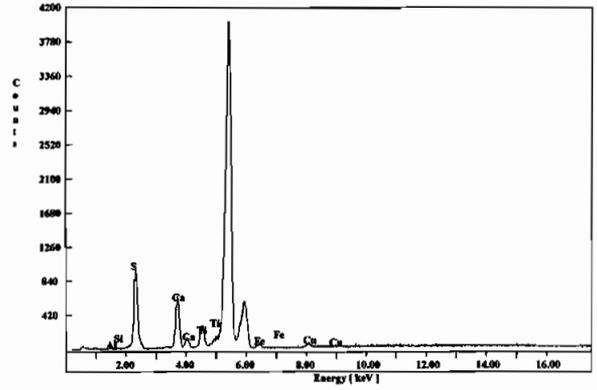


⑪ 薬・香?

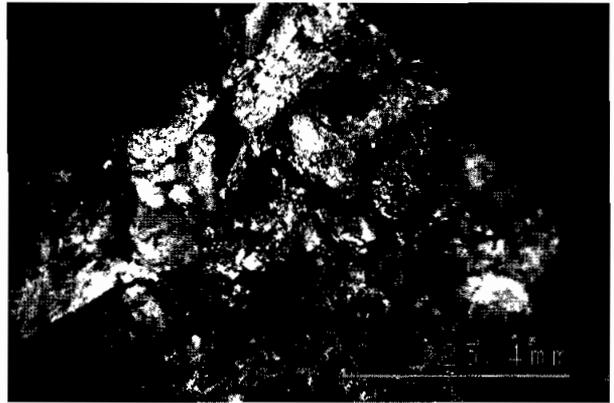




⑫ 葉・香?



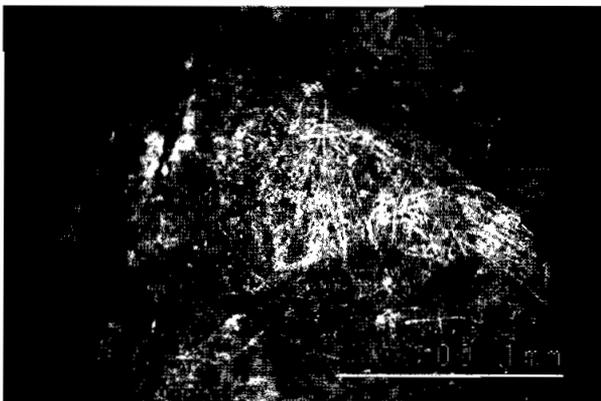
⑬ 稻穀



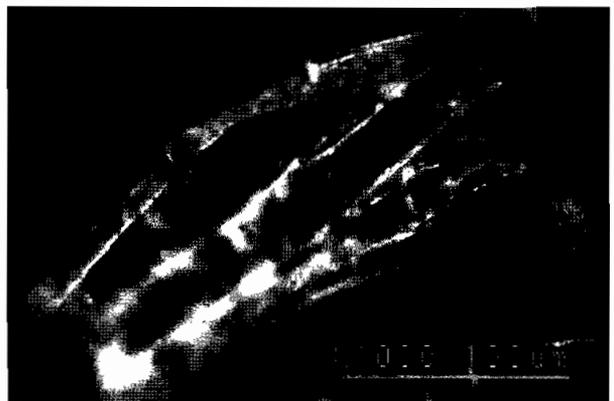
⑭ 種子



⑮ 香木? 薬物?



⑯ 包み紙



⑰ 包み紙

(西山要一)

〔註〕

- (1) 浅岡俊夫「廿日市の市立てから町屋へ」『廿日市町屋跡2 - 第8次・第9次・第10次調査報告 -』（『廿日市市教育委員会発掘調査報告書第2集』）廿日市町屋跡発掘調査団 六甲山麓遺跡調査会 1999
- (2) 藤田広幸 浅岡俊夫「廿日市市 宗高尾城跡 丹渡尾城跡 - 発掘調査の概要 -」七尾土地区画整理組合 1998
- (3) 『大正新脩大藏經』第十八卷 密教部一 大正新脩大藏經刊行會 1928
- (4) 奈良国立博物館『密教法具』（別冊増補篇共2冊）臨川書店 1993
- (5) 岡崎譲治「密教法具」『新版仏教考古学講座 第5巻 仏具』雄山閣 1976
- (6) 岡崎譲治監修「密教法具 (11) 花瓶」『仏具大事典』鎌倉新書 1982
- (7) 日光二荒山神社『日光男体山 山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店 1963
- (8) 註2の概要報告では当該花瓶を平安時代末期に捉えていたが、現在ではその変遷を調べる中で鎌倉期に捉えるのが妥当と考えている。今後ともさらに検討を加えていくつもりである。